

中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について（報告要旨）

矢田俊文（新潟大学人文学部）

a. 考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解する必要性について

考古学と文献史学とは依拠する資料が異なることからくる研究の特徴がある。考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解することなしに学融合は進まない。

文献史学の佐々木銀弥氏は、文献資料では、京都の資料が圧倒的に多ことから、研究の偏りがあること、日常品の研究が弱いと指摘している。私は、考古学は生産地、消費地の研究には強いが、集散地の研究はあまり強くないように感じる。考古学ではモノを流通させる中心人物が商人であるという観点が弱いように思う。考古学という学問が流通が複雑ではない社会の研究からはじまったということからくる問題があるのではないか。モノの流通が活発な社会の研究をすすめるべきではないか。このように考えると近世考古学が果す役割は大きいと思う。

信州松本城下の砥石問屋の発掘を行なった竹内靖長氏は次のようにのべる。発掘地の本町第4次調査地（長野県松本市中央2丁目2-21）は、信州松本城下本町は親町である本町・中町・東町3町の内の一つで、問屋等の大店が集中する町人町にあたる。第1検出面は18世紀末～19世紀前半である。一軒分の敷地全域を発掘し、通りに面して母屋、中央部分に中庭、奥に土蔵がある。中庭に廃棄土坑があり、そのうち第36土坑・第38土坑からは多量の砥石（出土点数4859点）が見つかった。出土砥石は火災により被熱したため廃棄されたものである。廃棄された砥石は、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められる。砥石は群馬県甘楽郡南牧村砥沢産のもので、すべて未使用である。文献史料には、「上野砥問屋 一人」（松本市中記）とあることから、本町第4次調査地は、上野産の砥石を商う砥石問屋の敷地である。また、「宝暦十三年（1763） 松本町中馬往来荷品」には、信州飯田行荷物として、「上野砥 貳拾駄程」とあることから、松本城下町の砥石問屋が信州飯田に上野産砥石を売り捌いていたことがわかる。

以上の竹内氏の説明から、松本城下町跡本町第4次調査地を集散地遺跡として位置付け直してみたい。

松本城下町跡本町第4次調査地から、2つの集散地遺跡の遺物の特徴を明らかにすることができる。第1点は、未使用製品が出土したこと、第2点は、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められることである。このうち、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められるという点は重要である。製作工程の最終段階に施された工具跡が認められるということは、モノを製品化するのは集散地で行なわれるのであって、生産地でおこなわれるのではないことがわかる。いいかえれば、物資を流通させるヒトは、集散地のヒトであって、生産地のヒトではないことがわかる。

#### b.中世考古学の成果

中世考古学の成果は多くあるが、モノの流通圏研究、集落の移動論、居館・城の移動論などは、とりわけ重要な成果である。このような考古学の成果を取り込むことなしに、文献史学の発展はあり得ない。

#### c.集散地遺跡、商人について

モノを流通させる中心的役割を担う者は商人であることは文献史学では共通の理解であるとおもわれる。しかし、考古学ではかならずしも共通の理解になっていない。そうであるならば、学融合のためにも、遺物として残る陶磁器・石製品・漆製品等の流通の復元研究をしなければならない。

#### d.モノにこだわって研究することの重要性について

道具帳、儀礼・贈答におけるモノ、財産目録、分散関係史料などの研究を文献史学として積極的にすすめる必要がある。

#### e.中世考古学のための史料解説の作成について

学融合をすすめるためには、中世考古学研究者を意識した史料の解説を文献史学の側で行なう必要があると思われる。その場合、考古学研究者による遺物・遺構研究を念頭に置いた解説が必要である。その試みとして、中世考古学文献研究会作業部会では、上野国禅宗寺院長楽寺の僧義哲が永禄八年（一五六五）正月から九月まで書いた日記である『長楽寺永禄日記』の解説に取り組み、現時点では、建蓋・天目、山小屋、蔵屋、小屋・庭の項目の解説が出来上がっている。

#### f.埋没遺跡の研究

文献資料では湊として確認できるにもかかわらず、現在の地形では湊とは理解しがたい地点がある。元禄地震によって隆起した安房府中などの湊がそれに当たる。

#### 〔参考文献〕

- 佐々木銀弥「中世後期地域経済の形成と流通」永原慶二・佐々木潤之介編『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会、1988年（同『日本中世の流通と対外関係』吉川弘文館、1994年、所収）
- 竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例—松本城下町—松本城下町跡本町第4次発掘調査から—」『松本市史研究』9号、1999年
- 矢田俊文「中世水運と物資流通システム」『日本史研究』448号、1999年
- 矢田俊文「日本中世史研究と中世考古学」前川要編『中世総合資料学の提唱 中世考古学の現状と課題』新人物往来社、2003年
- 矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 建蓋・天目」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山小屋」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 蔵屋」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年

る。最も危惧されるのは、そういった見解を基礎として考古学資料を解釈していくことであり、それは「位相の無い定説」を産み続けることになる。その部分を補完できる可能性を考古学は秘めているはずである。

おわりに

総体としての歴史学のなかで、文献史料や考古資料は、それを構成する一資料としては同じ位相にあることをまず強調したい。そのうえで、それぞれの手法を吟味した研究がなされる必要があるだろう。考古学的手法を用いる文献史学者、文献史料を用いる考古学者であることこそが、総体としての歴史を叙述するに当たって必要なことと認識している。冒頭の、「考古学者が必要とする文献史学研究」とは、基本的には考古学者が実施すべきものと個人的には考えている。

その際に、とくに考古学の側で重要なのは、立論の基礎となる概念の整理を通史的に行うことと考える。もしも、考古学的に観察される「物の移動」が、分析の結果は同じ現象と見なされるのに、弥生時代以前では「物々交換」とされ、中近世では「流通」とされるような状況が生じているとすれば、学問的には大きな問題であろう。考古学も、研究の個別分散化の進展で、対象とする時代以外の議論には疎遠となりがちであるが、それは何とかしなければならない。仕事上「好きな時代の遺跡」ばかり選べるはずのない（＝どんな時代にも首を突っ込まざるを得ない）埋蔵文化財行政に従事する研究者は、その深刻さを最もよく理解していると思われる。だからこそ、こういった問題に対し積極的に発言するべきだと思う。

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点を検討する視点（報告要旨）

矢田俊文(新潟大学人文学部)

はじめに

中世考古学、文献史学（日本中世史）、歴史地理学それぞれがもつ特質をさらに発展させることがまず重要である。その上で、学融合を目指す必要がある。

#### 1. 学融合の試みについて

##### a 学融合を試みる必要のある遺跡

中世考古学と文献史学（日本中世史）の学融合を目ざすといってもすべてのことがらについて行なうことは現実的ではない。まず、墓地、経塚、居館・城などで、学融合の試みをする必要がある。

墓地遺跡では文字が書かれた遺物が出土する場合がある。文字が書かれていれば書風の検討によっておおよその年代がわかる可能性がある。また、年号が書かれた卒塔婆が出土する場合もある。新潟県白根市の浦廻遺跡では元応二年（1320）と書かれた卒塔婆が出土した。この遺跡は石塔・陶磁器が出土していないが多くの卒塔婆が出土した興味深い遺跡である。一つの基準となる遺跡であろう。このような遺跡は、考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であると考ええる。

経塚には文字が書かれた経典が納められる。書風が検討できる遺跡であるから、これも考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であろう。

しかし、経塚の研究は文献史学の側はあまり熱心でないように思われる。一方、考古学では経塚の研究は盛んである。けれども、考古学の側の経塚についての関心はもっぱら外容器にあるようである。そのため、外容器ほどには礫石経などに興味を示さないようである。

礫石経に注目すると、外容器の研究からはわからない経塚の歴史像が浮かび上がって来るのではな

かろうか。礫石経に注目すると、12 世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写することが流行ったようである。

12 世紀前半から 13 世紀初頭の大物浦遺跡（兵庫県尼崎市）からは、経典が書写された約 1100 点の扁平な石が出土している。平清盛は大物浦遺跡とそれほど離れていない大輪田の泊（神戸市）の修築の際に一切経を書いた石を沈めて島を作らせている（平家物語）。平泉では、「如法経の石をば、結縁に持たせ給うべし」（原文カタカナ）と書かれた木簡が出土している。

12 世紀後半～13 世紀前半の広隆寺弁天島経塚（京都市）は経塚を作るために島が作られており、多字の礫石経が出土している。寺ノ上経塚（岩手県前沢町）では、12 世紀後半の渥美の壺の上に 10 個体以上の経典が書写されているかわらけが載せられる状態で出土している。このような事例をみると、12 世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写することが流行ったと考えられるのではなかろうか。経塚は経典が書写された紙・石・かわらけを検討の中心に据えなければ解明できない遺跡である。

#### b 学融合のための研究方法について

学融合のためには、遺跡の報告書が作成される以前でのさまざまな分野の検討会が重要である。今回はその試みである。よって、成果を持ち寄って披露し、そこでえた情報を持ち帰る場所ではない。それぞれの学問がもつ長所を理解しあう場にしたい。中世考古学でも文献史学でもない学問が学融合ではなく、どちらかに学問的基盤をもち、その学問を発展させる研究をしながらも、他分野の学問の特徴を理解しその成果を吸収できる能力をみにつけることによって、自らの分野の研究をさらに発展させる。そういう研究会にしたい。

### 2. 奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点について

#### a 中世考古学・文献史学・歴史地理学それぞれの成果がある地点

下町・坊城遺跡 D 地点のすぐ近くには江上館（国史跡）・下町・坊城遺跡 A・B・C 地点があり発掘が行なわれ、考古学的な検討が行なわれている遺跡である。さらに、文献史学では、下町・坊城遺跡 D 地点は奥山荘中条にある遺跡で、中条家文書等があることから、文献の研究成果もある地点である。さらに、奥山荘波月条絵図があることから、歴史地理学の成果もある地点である。

#### b 奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点は茂連屋敷か

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点は奥山荘波月条絵図に描かれている茂連屋敷なのかどうか検討する必要がある。

#### c 絵図の描かれ方について

もし、奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点が茂連屋敷であるとするならば、波月条絵図の描かれ方の検討が必要である。

#### d 京都系てづくねのかわらけと日本海側に所領をもつ地頭との関連について

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点では、かわらけは京都系てづくねのかわらけしか出土しない。奥山荘の地頭はなぜ鎌倉の影響は薄いのかについて、検討する必要がある。

#### e 11・12 世紀の遺構・遺物と城氏の関連について

奥山荘下町・坊城遺跡は 11・12 世紀代の居住区が存在する。奥山荘には地頭が補任される以前から領主の存在が確認できる。白河荘（新潟県笹神村・安田町・水原町等）を本拠としていた城氏の一族は、建仁元年（1201）4 月、城長茂の甥資盛と板額が鳥坂山（新潟県中条町）に蜂起しているので（吾妻鏡）、奥山荘にも拠点を持っていたことがわかる。また、阿賀野川水運により縄文時代より越後と深い関連をもつ会津地域にも城氏と関連する遺跡がある。12 世紀第 2 四半期を中心とする陣が峯遺

跡（福島県会津坂下町）も城氏に関連する居館であるとの伝承がある遺跡である。阿賀野川の最上流に位置する恵日寺遺跡（福島県会津磐梯町）も城氏と関連する伝承をもつ。恵日寺には中世の境内図が存在する。境内図には橋が描かれ、阿賀野川水運を恵日寺が掌握していたことがわかる。奥山荘下町・坊城遺跡は地頭の支配の問題だけではなく、奥山荘を越えた城氏の支配の問題の解明も迫られる。

#### 〔参考文献〕

- 『笹神村史 資料編一 原始・古代・中世』笹神村、2003 年  
『浦廻遺跡』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団、2003 年  
『福原京とその時代』神戸市教育委員会、神戸市埋蔵文化財センター、1996 年  
人間田宣夫『都市平泉の遺産』山川出版社、2003 年  
百瀬正恒「経塚出土陶磁器の特異性-関西の主要遺跡の分析から-」『日本貿易陶磁研究会 第 24 回研究集会資料集「経塚と陶磁器—その地域性」』2003 年  
及川真紀「東北地方の経塚と陶磁器」『日本貿易陶磁研究会 第 24 回研究集会資料集 「経塚と陶磁器—その地域性」』2003 年

奥山荘政所条遺跡群の展開—下町・坊城遺跡 D 地点の新知見を加えて—（報告要旨）

水澤幸一（新潟県中条町教育委員会主査）

#### 1 政所条遺跡群の概要

江上館は 15 世紀の武家居館であり、中条本家が居住者と考えられる。下町坊城 A 地点は、西側に 11 世紀頃からのものがみられ、15 世紀まで居住空間であった。15 世紀段階では、石組側の井戸がみられ、家臣団屋敷であったと考えられる。同 B 地点は、護摩を焚いた痕跡が認められ、15 世紀段階に密教寺院が存在していたことが判明している。同 C 地点は、12～16 世紀まで居住空間であった。13 世紀代のかかわりが大量に出土しており、D 地点が見つかるまでは C 地点が当時の中心地点と考えていた。発掘調査は、全体で平成 3 年～11 年まで行われ、現在は江上館が史跡公園としてオープンしている。それまでの調査成果は、『下町・坊城遺跡 V』（2001）にまとめているが、平成 15 年度に D 地点の鎌倉時代屋敷がみつかったため、改めて遺跡群の位置付けを考え直さねばならないこととなった。

#### 2 下町・坊城 D 地点北半（坊城館）の概要

平成 15 年度の発掘調査で、鎌倉時代の屋敷跡があたり、9 月～10 月の追加確認調査で区画溝の範囲を追跡したところ、南北 60m 強で東西 80m 弱の屋敷地であったことが判明した。ただし西辺は、数条の南北溝が存在しており、屋敷区画が動いている可能性がある。建物は東寄りに集中していて、同じ場所に何度も建て直されており、4～5 つの群を構成している。これらのほとんどが総柱建物であり、鎌倉後期のものである。したがって、波月条近傍絵図に描かれた領主屋敷に相当する建物と考えられる。詳細な遺構変遷については、来年度刊行予定の報告書で検討することとしたい。なお西側には遺構が少なく、広場的な空間であったと考えられる。

井戸は 8 基以上見つかっているが、その中に石組み側を持つ井戸がある。北陸では基本的に 15 世紀代に普及し始めるが、ここでは 14 世紀前半代に現れていることが注目される。金沢でも近年、鎌倉以前に遡る例（大桑ジョウデン遺跡）がみつかっており、古い時期から部分的な技術伝播があった